

■白隠慧鶴 禅僧。名利求めず、衆生済度のために東奔西走、独自の公案体系確立し、臨済宗中興の祖となった。

はくいんえかく

出世景清初演1685＝ 駿河国浮島(静岡県沼津市)に生まれる。

別子銅山始・1691＝ 6歳： 寺によくお参りするようになる。

芭蕉+師宣没 1694＝ 9歳：
生類憐令頂点1695＝10歳： 「摩訶止観」の講義を聞いて、地獄の苦患に身を震わせた。

・・・・・・1699＝14歳： 出家し、郷里の松蔭寺の単嶺について得度、慧鶴と名づけられた。

について沼津大聖寺の息道に随侍、

赤徳浪士切腹1703＝18歳： 大聖寺を辞し、清水の禅叢寺に行く。

団十郎刺殺・1704＝19歳： この年、母が死去。 美濃国大垣の瑞雲寺に赴き、馬翁の厳しい指導を受け、「禅関策進」をひもとき、奮起して本格的な求法を開始した。

御蔭参流行・1705＝20歳： 本格的な行脚の旅に出、

・・・・・・1706＝21歳： 伊予国松山の正宗寺に至り、逸禅の講じる「仏祖三経」を聞いて深く感銘し、以後、「禅関策進」と「仏祖三経」をつねに座右に置いて師友とした。

富士宝永噴火1707＝22歳： この年、富士山が大噴火して村民らが逃げ惑う際も動ぜず座禅を組み続ける。

汁`ッ拘束・ 1708＝23歳： 越後国高田の英巖寺に赴き、性徹の苛烈な鉗鎚に耐えて猛烈に工夫し、遠寺の鐘声を聞いて豁然と悟り、所解を性徹に呈したが許されなかった。そこで信濃国飯山の正受庵に道鏡慧端(正受老人)を訪ね、機鋒峻烈な慧端の膝下で弁道に励み、大悟したが、まだ不足と精進し過ぎて、

徳川綱吉没・1709＝24歳：

・・・・・・1710＝25歳： 無理がたたって重病に陥る。苦境を脱して、再び行脚に出る。

冥途の飛脚・1711＝26歳： 「沙石集」を読んで、自らの精進を誓い、

乾山陶器店・1712＝27歳： *ある日托鉢の途次、一老婆に竹ぼうきで打たれて忽然と悟り、ついに慧端の印可を得たといわれる。

その後も各地の諸師に歴参し、

国姓爺合戦・1715＝30歳： 念願かない、美濃の草庵に籠り坐禅するが、父が病床に就くなどしたため、

徳川吉宗将軍1716＝31歳：

隅田川の桜・1717＝32歳： 松蔭寺に帰住した。

御蔭参流行・1718＝33歳： 京都妙心寺の首座となり、白隠と号するが、大禅刹への出世を好まず、松蔭寺を本拠として活動を続け、

小石川薬園・1721＝36歳：

「大慧書」「禅門宝訓」「臨済録」「五家正宗贊」「碧巖録」などを盛んに提唱講演した。

その間に、現在もなお良く読まれて著名な「座禅和讃」を書いたと考えられる(芳澤勝弘説)。

懐徳堂公認・1726＝41歳： *「法華経」を読み始め、コオログの声で真理に合点、大自在の境地に達する。白隠の高弟・東嶺はこの年までを、修行という意味で“因行格”と呼び、以後、没するまで、衆生済度のために東奔西走の活躍をした半生を“果行格”と呼んだ。

・・・・・・1730＝45歳：

享保大飢饉・1732＝47歳：

請われるままに各国諸寺を巡錫し、晩年に至るまで禅の布教に尽力したが、その足跡は東海、東山、畿内、山陽に及ぶ。

ヰッ船出没始 1739＝54歳：

・・・・・・1740＝55歳： この年、*松蔭寺で講話した際には、全国から集まった400余名が感動の余り身じろぎせず聞き入った。

徳川吉宗隠居1745＝60歳：

忠臣蔵・・・1748＝63歳：

・・・・・・1749＝64歳： 「遠羅天釜」「諦忍律師語録」刊。

徳川吉宗没・1751＝65歳：

山脇東洋解剖1754＝69歳： 「辺鄙以知吾」成る。

源内物産会・1757＝72歳： 「隻履達磨像」。 青年時代の重病克服時の体験をもとにした独自の健康法の「夜船閑話」を刊行。

宝暦事件・・・1758＝73歳： 三島に土地を得て、龍沢寺の創建を進め、

大岡忠光没・1760＝75歳： 同寺で、「息耕録」を講じる。

忠臣蔵大当り1766＝81歳： 「壁生草」成る。

意次側用人・1767＝82歳： 「達磨像」、

久留米藩工事1768＝83歳： *終生首座の僧階にとどまったまま、遺言も残さずに、松蔭寺で没した。

藤原東演「禅の名僧列伝」、「人づくり風土記(静岡)」、「この人どんな人」、「没年日本史人物事典」、平凡社百科事典、日本の古典名著、